

『資本論』とは何か

今日から、二〇回かけて『資本論』の弁証法¹を学んでいくことになりました。テキストには新日本出版社の『資本論』(全二三冊)を、サブテキストには不破哲三著『資本論』全三部を読む²(全七冊)を使います。

いうまでもなく『資本論』は、科学的社会主義の理論の要となる全三部の著作であり、古典中の古典といわれる経済学の本です。

マルクス(一八一八〜一八八三年)は、二五歳の時から経済学の研究をはじめ、その生涯を傾けて『資本論』に取り組み、その全エネルギーを注いだところから、自ら『呪われた本』(全集³一四八ページ)とまで称したのです。それでも六五歳で死亡するまでに完成したのは、第一部(一八六七年)のみであり、第二部、第三部は未完成の草稿にとどまっていました。それをエンゲルスが編集して、それぞれ一八八五年、一八九四年にやっ出版にこぎつけたものです。第四部に相当する『剰余価値学説史』(全集⁴I、II、III/国民文庫全九冊)は、一九〇五年から一九一〇年にかけてカウツキーにより編集・出版されましたが、書きかえ、削除など編集上の問題が多いことから、一九五六年から一九六二年に草稿に準拠した「ドイツ」版が出版され、現在は草稿そのものの「新『メガ』」(新マルクス・エンゲルス全集。マルクス、エンゲルスが発表した論文、著作のみならず、ノート、メモなども含め、書き残した資料のいっさいを年代順に収録する全集。最終的には全一四巻となり、二二世紀前半にかかる一大事業として進行中)版が刊行されています。

『資本論』の最終目的は、「近代社会」、つまり資本主義社会の「経済的運動法則を暴露すること」(『資本論』⁵①一二ページ、新日本出版社/原書一六ページ)にあります。では、資本主義的生産様式の運動法則とは何を意味しているのでしょうか。

盟友エンゲルスは、『反デューリング論』のなかで、次のように述べています。

「それは、封建的な生産および交換の諸形態の遺物の批判に始まり、資本主義的諸形態がそれらにとって代わる必然性を論証し、ついで、資本主義的生産様式とそれに照応する交換諸形態との諸法則を、肯定的な側面から、つまりこれらの法則が社会の一般的な目的を促進する側面から展開し、そして、資本主義的生産様式の社会主義的批判で、つまりその諸法則を否定的な側面から叙述することで、すなわち、この生産様式はそれ自身の発展によってみずからを不可能とする点に向かってつきすすんでいるということの証明で、終わるのである」(全集⁶②一五五ページ/『反デューリング論』上、二二二ページ古典選書)。

いわば資本主義的生産様式の諸法則をとらえ、その生成、発展、消滅という運動の必然性を研究対象とした著作ということができるといえるでしょう。

では、いったい何のために、資本主義の運動法則を明らかにするのでしょうか。マルクスは、運動法則を暴露したとしても、「その社会は、自然的な発展諸段階を跳び越えることも、それらを法令で取りのぞくことも、できない。しかし、その社会は、生みの苦しみを短くし、やわらげることはできる」(①一二ページ/一六ページ)といっています。つまり、その運動法則を認識することによって、その法則にそった目的意識的活動をつうじて、社会の合法的発展をはかり、未来社会にむけて「生みの苦しみを短くし、やわらげる」ためだということです。

マルクスは資本主義の運動法則が、階級間の対立を生みだす「敵対的性格」(①二〇ページ/二二ページ)をもっていることを指摘しています。同時に、資本主義社会を批判し、変革しようするのはプロレタリアート(労働者階級)だけであり、プロレタリアートこそが「資本主義的生産様式の変革と諸階級の最終的廃止とをその歴史的使命とする階級」(①一二ページ/二二ページ)であると熱をこめて語っています。

「序言〔初版への〕」の最後に書かれた「＼なんじの道を進め、そして人々をして語るにまかせよ！」(①一四ページ／一七ページ)との言葉は、もちろんマルクス自身に向けられたものですが、同時にプロレタリアートに対して、『資本論』をつうじて資本主義的生産様式の運動法則を認識し、偏見をおそれず変革の立場を貫け」との思いを託したものと見えるでしょう。

このマルクスの願いは現実のものとなり、『資本論』は「労働者階級の聖書」(①四三ページ／三九ページ)として今日に至っているのです。

現代において『資本論』を学ぶ意義

不破哲三氏は、一九九五年の春から系統的に『資本論』の研究を始め、『エンゲルスと『資本論』』『レーニンと『資本論』』『マルクスと『資本論』』と立て続けに出版し、二〇〇四年五月『資本論』全三部を読む』の全七冊を上梓(いずれも新日本出版社)して、一〇年間に及ぶ『資本論』研究を一応完結するに至りました。

不破氏は、最後の著作のなかで、ようやく『資本論』の「全貌をとらえ得たという気持ち」(第一冊三六ページ)だと語り、『資本論』探究における私自身の現在の到達点を、力の及ぶ限り、反映させた(第七冊二〇八ページ)と述懐しています。

不破氏をして、これほどまでのエネルギーを投入させたのは、けっして研究のための研究としてではなく、「私たちが生きているこの時代——現代を分析する最良の手引きになる」(第二冊二二ページ)と考えたからにはほかならないでしょう。

さらに不破氏は、「二一世紀・『資本論』のすすめ」(『前衛』二〇〇五年二月号)において、現代日本で『資本論』を学ぶ意義を、次の二つに要約しています。

一つには、二一世紀が、「資本主義社会の根底をゆるがすさまざまな状況が積み重なって」「全体として、新しい社会の『生みの苦しみ』を大きな特徴とする世界史の一時代となることは、間違いない」からです。

現代は、資本主義のもつ矛盾が全世界的に激化し、地球的規模でこの矛盾を解決し、より高度な社会への発展が求められている時代となっています。南北問題にみられるような全世界的な貧富の格差の拡大、人類の生存にかかわるような環境破壊はその一つのあらわれとなっています。例えば、マイクロソフト社のビル・ゲイツ会長の個人資産は、最貧国四九ヶ国六億人の一年間のGNPより大きいといわれているほどです。

二〇世紀のはじめには、資本主義という一つの体制が全世界を支配していましたが、いまでは発達した資本主義国の人口は約九億人と、地球人口六五億人の一四パーセントにも足りません。不破氏の分析によりますと、人口六二億人の時点で、あとは「社会主義をめざす国」一四億人、アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカのグループ三五億人、「旧ソ連・東欧圏」のグループ四億人となっています。とりわけ第三のグループは、旧植民地の諸国であり、資本主義国の新植民地主義に反対し、政治的・経済的に自立した方向を旨とす、新しい社会体制への動きが始まっていて注目されることです。

ラテンアメリカでは、大陸的規模で社会変革が起きています。この地域は、長年にわたってアメリカ資本主義の支配地域でしたが、一九九九年のベネズエラに続き、二〇〇三年のエクアドル、ブラジル、アルゼンチン、二〇〇四年ウルグアイ、二〇〇五年のボリビアで、アメリカの妨害をはね返し、選挙で多数を得て相次いで革新政権が誕生しました。なかでもベネズエラのチャベス政権は、公然と社会主義をめざすといっています。

二つには、『資本論』の内容をより充実した形で読める、そういう新しい条件が発展してきている」ことです。

マルクスは、『資本論』そのものの草稿のみならず、「五七〇五八年草稿」と「六一〇六三年草稿」などを中心とする、膨大な『資本論』の準備草稿を残しています。『資本論』第一部を完成したのみでマルクスが亡くなったため、第二部、第三部の編集は、エンゲルスに託されることになりました。しかし、エンゲルスは、第二部、第三部の草稿を読みとるのに追われ、これらの準備草稿まで十分に読み込むゆとりはありませんでした。そのため、「そこから来る編集上の弱点が、いくつかの面で、現行の『資本論』に残されていることは、否定できない」ところとなっています。

しかし、現在では、「新『メガ』」によって、これらの準備草稿まで読むことができるのですから、「私たちは、第二部、第三部を編集したエンゲルスよりも、もっと有利な条件で『資本論』を読むことができる」のです。それだけではありません。マルクスの時代には、まだ資本主義は発展途上にあっただのに対し、現代では、すでに成熟しきった完成態となっているところから、その「敵対的性格」がより顕在化しています。

マルクスが『資本論』でとりあげたのは、当時の先進資本主義国であったイギリスでした。エンゲルスは、一八八六年「編集者の序言〔英語版への〕」のなかで、『資本論』の到達した結論は、いまや「ドイツやスイスだけでなく、フランスでも、オランダやベルギーでも、アメリカでも、またイタリアやスペインにおいてさえも」、「労働者階級の大きな運動の基本的諸原理となりつつある」(①四三ページ/三九ページ)ことを指摘しています。マルクス、エンゲルスの時代の資本主義は、自由競争の段階でしたが、二〇世紀初頭には、独占資本主義の段階に入りました。さらに第二次大戦後は国家独占資本主義の局面に入ったといわれ、現代は「新自由主義」型国家独占資本主義の局面にあるといわれています。「新自由主義」改革を押しすすめる世界銀行のレポートによると、「新自由主義」型国家独占資本主義のもとでは、医療、教育、福祉などはすべて民間に委託し、国家の役割

は国防と治安に限定すべきだといっています。つまり国家から共同の利益を実現するという役割を奪い取り、国家をむきだしの階級支配の機関にしようというものです。

わたしたちは、一方で準備草稿にまで目を通すことができると同時に、他方で現代の資本主義を念頭におきつつ、『資本論』の内容を現代の経済的諸現象と結びつけて、より充実した形で読めるという、有利な条件のもとにあるのです。

不破氏は、現代における『資本論』を学ぶ意義を以上の二点としていますが、私は、一〇年間に及ぶ不破『資本論』研究の成果にたつて『資本論』を学ぶことを、三つ目の意義としてあげておきたいと思えます。

不破氏は、『資本論』を『資本論』自身の歴史のなかで読む(第一冊四九ページ)ということをして「自分の研究態度を表現する一種の合言葉」としています。

それは、言い換えると、『資本論』を完成された「労働者階級の聖書」として読むのではなく、マルクスの認識の弁証法的発展過程の一到達点として読むことを意味しています。いかに天才マルクスといえども、その認識には、個人的、歴史的限界があり、『資本論』の一字一句を絶対化することはできないからです。

マルクスの読みにくく、しかもまとまりのない雑然とした草稿にもとづいて、エンゲルスが編集した第二部、第三部の場合には、なおさらだといえることができます。

不破氏の功績は、この『資本論』をその草稿のみならず準備草稿のいつさいも含めて、マルクスにおける認識の弁証法的発展過程として読み解くという新境地の手法を開拓したということにとどまらず、その研究成果のうえにたつて、現行『資本論』の限界を明らかにすると同時に、現代的にどう読み解くべきかについても、示唆に富む提案をしているところにあります。

弁証法とは何か

以上によって、二一世紀の今日において『資本論』を学ぶ意義は、だいたい明らかになったと思いますが、では、本講座がなぜ『資本論』の弁証法」と題することになったのか、についてお話ししておきましょう。

実は、その源は、『資本論』自身にあるのです。

『資本論』第一部が一八六七年に出版された直後から、マルクスの独特の文体は、様々な議論をよんだようです。

マルクスは、「あと書き(第二版への)」のなかで、『資本論』で用いられた方法は、すでにいろいろと相互に矛盾した解釈がそれについてなされていることで証明されているように、あまり理解されていない(①二三ページ/二五ページ)としたうえで、その方法とは「弁証法」であると述べています。

弁証法とは、一言でいうならば、「自然、人間社会および思考の一般的な運動＝発展法則にかんする科学」(全集①一四七ページ/『反デューリング論』上、二〇一ページ)であり、古代ギリシャ哲学以来、運動、変化、発展そのものの真理を認識する方法(認識論)として長い歴史をもっています。

人類は、その長い歴史をつうじて、どうすれば目の前に広がる客観世界を正しく認識しうるのか、その真理認識の方法(思惟法則)を探究してきました。その歴史をつうじて、すべての事物は、相対的・一時的には固定し、静止しているものの、絶対的・長期的には運動しているという、静止と運動の統一としてあることを知るに至りました。

そこから真理を認識する(客観的事物に一致する認識を得る)ためには、事物をバラバラな、固定し、静止した

ものとしてとらえる形式論理学と、事物を連関し、運動するものとしてとらえる弁証法的論理学(略して弁証法)という二つの思惟法則を、ともに必要とすることを理解したのです。

形式論理学は、自然科学の発展のなかで、事物を分析、分解、解剖することをつうじて生まれてきた、常識的なものの見方です。事物は一見すると静止した、固定しているものに見えますから、この形式論理学は広い妥当領域をもっており、国会の答弁や法解釈は、すべてこの形式論理学にもとづいています。

しかし、この常識的なものの見方も、事物をその運動においてとらえようとすると、限界につきあたらざるをえません。

例えば、生と死とは明確に区別され、「生は生、死は死」として固定しているように見えます。では脳死の人は、生きているのでしょうか、それとも死んでいるのでしょうか。脳死とは、脳は死んでいるものの、人工呼吸により、心臓は動いている状態を意味しています。こういう生から死へ移行するという運動をとらえてみると、脳死の人は「生きていると同時に死んでいる」といわざるをえないのです。脳死が問題となるのは、臓器移植においてなのですが、実は臓器移植は生きている人の臓器でないといえず移植できないのです。

したがって臓器移植とは、「生きていると同時に死んでいる」人を、形式論理学的に「死んでいる」とみなして、実際にはそこから「生きた」臓器を取り出して移植するという矛盾を示しているのです。

このように、脳死の人を「生きていると同時に死んでいる」、あるいは「生きていると同時に生きている」、「死んでいると同時に死んでいない」という対立物の統一としてとらえるのが、弁証法的論理学なのです。

運動を運動としてとらえるためには、一つの事物のなかに対立する二つの側面を見だし、この対立する二つの側面の統一としてとらえるしかないので、これを対立物の統一といえます。対立物の統一は弁証法の核心を

なすものであり、これから順次、その内容を詳しくみていくことにします。

このように、事物を静止しつつ運動するものとして正しく認識するためには、形式論理学と弁証法の両者がともに必要になってきます。ほんらい弁証法でとらえるべき領域に形式論理学を持ち込むとき、それは誤った認識となり、それが形而上学とよばれることとなります。形式論理学は、事物の相対的に固定し静止した側面をとらえる正しい認識方法ですが、形而上学は誤った認識方法です。つまり、「生きていると同時に死んでいる」「脳死の人を、「死んでいる」と決めつけるのが形而上学ということになります。

この「弁証法の一般的な運動諸形態をはじめて包括的で意識的な仕方でも叙述した」(①二八ページ／二七ページ)の、ほかならぬヘーゲルでした。ヘーゲルは、『大論理学』『エンチクロペデー』(この一部が『小論理学』『法の哲学』などで、弁証法を「包括的な仕方でも叙述」したのです。

マルクスは、ヘーゲルからこの弁証法的なものの見方を学び、「あと書き〔第二版への〕」のなかで、「それゆえ私は、自分があの偉大な思想家の弟子であることを公然と認め、また価値理論にかんする章のあちこちで、彼に固有な表現様式に媚を呈しさえした」(同)と語っています。

しかし同時に、マルクスは、「私の弁証法的方法は、ヘーゲルのそれとは根本的に異なっているばかりでなく、それとは正反対のものである」(同)と述べています。というのもヘーゲルの弁証法は、観念論的(頭のなかの産物を第一次的なものと考える)なのに対して、マルクスの弁証法は、唯物論的(客観世界として存在するものを第一次的なものと考える)だからです。「弁証法はヘーゲルにあつてはさか立ちしている。神秘的な外皮のなかに合理的な核心を発見するためには、それをひっくり返さなければならぬ」(同)と、マルクスは述べています。

なぜ『資本論』の弁証法」なのか

自分の著作において、そこに用いた「方法」について叙述するというのは、あまり例がないことです。実は、この点もマルクスがヘーゲルに学んだものだったのです。ヘーゲルは、『法の哲学』の序文のなかで、自分の用いた方法が弁証法であるところに、『法の哲学』の真理性があると語っていますが、マルクスもそれに習って、弁証法的方法を採用したから資本主義の経済法則を正しくとらえることができたのだ、といたかったのでしょうか。

では『資本論』のなかに、弁証法はどのように生かされているのでしょうか。マルクスは、「研究の仕方」にも「叙述の仕方」(①二七ページ／二七ページ)にも弁証法的方法を用いたと「あと書き〔第二版への〕」で述べていますが、ここで問題となるのは、『資本論』という著作における「叙述の仕方」における弁証法的方法です。マルクスはそれを、素材のさまざまな「発展諸形態の内的紐帯をさぐり出し」、「素材の生命が観念的に反映」(同)されるように叙述することだとしています。

ちよつと分かりにくい表現ですが、そこには、大きく二つの意味が込められていると思います。

一つは、資本主義的生産様式を、最も単純なものから、より複雑な、より高度なものへ、一つひとつその連関(内的紐帯)を明確にしながらか、論理を進展させていくという、「萌芽からの発展」形式として展開するという仕方です。それは植物の胚(種)が、芽を出し、茎となり、葉を出し、やがて花が咲くというような発展形式であるところから、一般的には「萌芽からの発展」とよばれています。マルクスはこれを「発生的に展開する」(全集⑥三六四頁／『剰余価値学説史』①一八〇頁)国民文庫」といっている方をしています。

つまりそれは「諸現象の変化とそれらの発展の法則、すなわち、ある形態から他の形態への移行、連関の一つ

の秩序から他の秩序への移行の法則」(①二五ページ／二六ページ)をたどる発展なのです。

このように、事物を「萌芽からの発展」という運動においてとらえるためには、一つの事物のなかに対立する二つの側面を見いだし、この対立する二つの側面の交互作用をつうじて事物の運動をとらえるという弁証法が必要になってくるのです。

マルクスは、この見地にたつて、資本主義的生産様式の「胚」に相当する「商品」から、『資本論』の叙述を始めています。そしてこの商品のなかに価値と使用価値という対立する二つの側面があることを明らかにし、次いでこの価値と使用価値の対立が商品と貨幣の対立へ、さらに販売と購買の対立、富と貧困の対立、生産と消費の対立などを経て、資本主義の根本矛盾にまで発展していくことを明らかにしていきます。

このように一つのものから次のものへと連関しつつ発展していくものとしてとらえることによって、資本主義的生産様式という一箇の有機体が生命力をもったものとして描きだされ、その「生命が観念的に反映」されることになるのです。

マルクスは、「たとえどんな欠陥があろうとも、僕の著書の長所は、それが一つの芸術的な全体をなしているということなのだ」(全集①一一一ページ)と述べたうえで、それが「弁証法的に編成」(同)された著作の特徴だと語っています。「萌芽からの発展」という弁証法的発展形態において、『資本論』の叙述がなされているところに、「二つの芸術的全体」という長所があらわれているのです。

二つには、『資本論』の研究対象となっている資本主義的生産様式そのものを、これ以上発展しようがない絶対的生産様式としてではなく、「社会的生産の歴史的に一時的な発展段階」(①一八ページ／二〇ページ)という運動体としてとらえるところにも弁証法は生かされているのです。

マルクスは、自分の立場は、「経済的社会構成体(政治、法律、経済などを含む社会全体——高村)の発展を一つの自然史過程ととらえる」(①一一一ページ／一六ページ)ものだといっています。自然には自然としての一定の法則があり、自然は、その法則にしたがって発展していきます。宇宙の発展や、種の進化をみてもそのことは明らかです。それと同様に、人間の社会にも「鉄の必然性をもって作用し、自己を貫徹する」(①九、一〇ページ／一二ページ)諸法則があり、この法則にしたがって、資本主義的生産様式もいずれ、より高度の社会へと移行せざるをえないものとして、マルクスはとらえたのです。

マルクスは、この『資本論』の立場に対して、ブルジョア経済学(俗流経済学・古典派経済学)は、「資本主義的秩序」を「社会的生産の絶対的で究極的な姿態ととらえる」(①一八ページ／二〇ページ)ものだ、といって批判しています。

ですから、『資本論』の目的は、たんに資本主義的生産様式の運動法則を明らかにするにとどまらず、「他のより高い社会有機体」(①二七ページ／二七ページ)、つまり社会主義・共産主義社会との「交替を規制する特殊な諸法則を解明することにある」(同)のです。

「その合理的な姿態では、弁証法は、ブルジョアジーやその空論的代弁者たちにとっては、忌まわしいものであり、恐ろしいものである。なぜなら、この弁証法は、現存するものの肯定的理解のうちに、同時にまた、その否定、その必然的没落の理解を含み、どの生成した形態をも運動の流れのなかで、したがってまたその経過的な側面からとらえ、なにもものによっても威圧されることなく、その本質上批判的であり革命的であるからである」

(①二九ページ／二八ページ)。

マルクスは、「本質上批判的であり革命的である」弁証法を用いて、「敵対的性格」をもつ資本主義的生産様式

は変革されねばならないという変革の立場をつらぬいたのです。そのため長年の友人であったクーゲルマンが、マルクスに対して、労働運動、社会主義運動から手を引いて、『資本論』の完成という文筆活動に専念するよう忠告したとき、マルクスはあえて交友断絶という厳しい態度をもってこれに答え、二度と二人の交友関係を復活させようとはしませんでした。

弁証法は『資本論』の生命の源

こうしてみてみると、弁証法あつての『資本論』であり、弁証法は『資本論』を『資本論』たらしめている、『資本論』の生命の源ともいふべきものです。弁証法と『資本論』とは切っても切れない関係にあり、だからこそマルクスも、『資本論』の方法は弁証法的方法であるという、異例ともいふべき「あと書き」(第二版への)を書いているのです。

この点をもっとよく理解したのがレーニンでした。レーニンは、ヘーゲル『論理学』を学んだ『哲学ノート』のなかで、『資本論』と弁証法との関係について次のように述べています。

「警句。ヘーゲルの〈論理学〉全体をよく研究せず理解しないではマルクスの〈資本論〉、とくにその第一章を完全に理解することはできない。したがって、マルクス主義者のうちだれひとり、半世紀もたつのに、マルクスを理解しなかった!!」(レーニン全集^⑧一五〇、一五一ページ／『哲学ノート』一五〇、一五一ページ国民文庫)。

ここには、自分はヘーゲル弁証法を学んだから『資本論』を「完全に理解」したとする、レーニンの自負がみられます。弁証法を研究し理解しなければ、『資本論』第一章のみならず、『資本論』を全体として理解しえない、ということにもなるでしょう。

「マルクスは『論理学』(大文字ではじまる「著書としての『論理学』」)をのこさなかったとはいえ、『資本論』の論理学を残した。……『資本論』のなかでは、ヘーゲルにあるすべての価値あるものを取りいれ、そしてこの価値あるものを前進させたところの唯物論の、論理学、弁証法および認識論……が、一つの科学に適用されている」(同二八八ページ／同二八八ページ)。

この観点にたつてレーニンは、「資本論の論理学」を著そうとして、その準備をすすめるのですが、ロシア革命が切迫する情勢のなかで、結局その時間的余裕は与えられませんでした。

その後、ソ連の哲学者、ローゼンタールやイリエンコフが、それぞれ同名の『資本論の弁証法』(青木書店と合同出版)を出版しています。しかし、どちらも、『資本論』のあれこれの箇所弁証法を発見するという立場にたつものであつて、これらの著作を学んでも、『資本論』のなかに弁証法のカテゴリーがちりばめられていることは理解しえても、弁証法をとおして『資本論』そのものを理解することにはつながらないという致命的な弱点をもっています。

というのも、弁証法は「たんなる証明用具」ではなく、「なによりもまず、新しい成果を見いだすため、既知のものから未知のものへと前進するための方法」(全集^⑩一四〇ページ／『反デュリング論』上、一九二ページ)だからです。つまり、弁証法は、事物の存在様式を対立物の統一として証明するための用具ではなくて、それを使って事物を「科学の目」で探究し、既知の事実から未知のものである運動の諸法則をつかみ出し、人間の認識をより真理に向って前進させる方法なのです。

マルクスは、この弁証法を使って、当時の資本主義社会にとって「既知のもの」であった商品や貨幣、資本、利潤、労賃、地代などのカテゴリーを根本から見直すことをつうじて、資本主義的生産様式の運動の諸法則とい

う「未知のものへと前進」していったのです。

ですから、私たちは、『資本論』のなかにあれこれの弁証法のカテゴリーを探し出すのではなく、マルクスが資本主義的生産様式の生成、発展、消滅の運動法則を発見し、叙述するうえで、弁証法を真理探究の武器としてどのように活用したのか、という見地から、『資本論』の弁証法」を探究していかなければなりません。

それは、「弁証法を用いて『資本論』の真髄を読み解く」という作業であり、この作業をつうじてレーニンの残した課題に取り組むことにもなるのです。

当然この過程をつうじて、弁証法の様々なカテゴリー、例えば、量と質、本質と現象、内と外、限界の弁証法、抽象的可能性と具体的可能性、偶然性と必然性などのカテゴリーを学んでいくことにもなります。とりわけ制限と当為の弁証法は資本の全運動を解明する鍵となるものです。

『資本論』と弁証法を共に学ぶ

以上みてきたように、本講座は、不破氏の研究成果のうえにたつて『資本論』そのものを学ぶと同時に、弁証法の諸カテゴリーをも学ぶという、二つの主題をもつこととなります。

これは一見すると大変に欲ばった無謀な試みのように思えます。諺ことわざにも、「二兎を追うものは、一兎をも得ず」とあるくらいです。

しかし、実はその逆であつて、弁証法を学んでこそ、『資本論』をその真髄において理解することができません。『資本論』の太い骨格を理解するためには、弁証法の見地にたつて『資本論』の論理的展開を読み解くことが求められているのだと思います。よく『資本論』は難しいといわれます。その理由はいろいろあると思いま

すが、その一つに、論理の骨太い展開が理解できないところから、どこが本道で、どこが脇道か分からなくなり、読んでいるうちに迷子になってしまうということがあると思います。

それでも第一部は、マルクス自身の手になるものですから、それ自身「一つの芸術的全体」をなしていて、論理の展開がみえやすくなっています。「価値理論にかんする章のあちこち」で、ヘーゲル弁証法の「固有な表現様式に媚を呈しさえした」(①二八ページ/二七ページ)とまでいつているのですから、マルクスも、第一部の弁証法的展開にはかなり自信があつたのでしよう。

しかし、エンゲルスの編集に委ねられた第二部、第三部は、「一つの芸術的全体」にまで仕上げられるに至らなかったものですから、そのぶん論理の弁証法的展開がみえにくくなっています。それだけに、読者の側から、弁証法の観点にたつて、骨太い論理構造をしっかり読み解くことが求められているのです。

そういう論理構造がはつきりみえてくれば、『資本論』はけつして難しいものではなく、推理小説以上に読み物として面白いものとなつてくることでしょう。

マルクスは、出版当時の新聞の書評に、『資本論』の叙述は、「少数のごく特殊の部分を除けば、一般に理解しやすいこと、明瞭なこと、そして対象の高度の科学性にもかかわらずなみなみならず生き生きしていること、よつて特徴づけられている」(①二二ページ/二二ページ)とあるのを、我が意を得たものとして紹介しています。

『資本論』を弁証法的に読み解くことによつて、マルクスが読者の対象とした労働者にとつても、論理の展開が「明瞭な」かつ「一般的に理解しやすい」ものとなり、「高度の科学性」を保持しつつ、資本主義の経済法則を「なみなみならず生き生き」した叙述としてとらえることができるのです。

この書評にみられる精神を生かして、皆さんと一緒に学んでいきたいと思えます。